

# 何故ウィルソンは「悲劇」の「主人公」なのか？

## 『まぬけウィルソン』試論<sup>1</sup>

今井 亮一

1

本稿はマーク・トウェインの『まぬけウィルソン』(1894)について、正に作品タイトルを担う人物ウィルソンをめぐる考察である。

しかし、ウィルソンは作品のほとんどにおいて存在感も薄く、また、この作品の小説的な評価を考えた場合、彼の人物造形が最もよく出来ているとは言い難い。先行研究でも多く注目されているのはトム(本稿でも作品に倣って「王位を略奪した小さな奴隷」<sup>2</sup>をトムと呼ぶ)やロクシーといった人物であり、例えばジェームズ・M・コックスはロクシーの人物像の深みを評価し、「彼〔ウィルソン〕とその「双子」たる偽物のトム・ドリスコルは、キャラクターへと独立することなく、むしろプロット推進装置の重要な部品として機能している」<sup>3</sup>と一蹴している。そのため、「作品タイトルを担う人物ウィルソンをめぐる考察」は、正攻法のように見えて、どこか釈然としないものとなる。そもそも、何故ウィルソンがタイトルを担う「主人公」なのか？

作品の「何故」を巡るならば、広く議論されてきた通り、アメリカでの出版時に採用されたタイトル『まぬけウィルソンの悲劇ならびにかの異形の双子の喜劇』に関して、『まぬけウィルソン』が何故「悲劇」なのかも問題となる<sup>4</sup>。確かに作品の19章ではトムによる事実上の「父殺し」という悲劇的な話が描かれているし、結末も、チェンバーズは社会に居場所を失い、トムは奴隷として川下に売られるという悲劇的なものではある。しかし、この結末を引き寄せる裁判の場面は悲劇にふさわしい重さというよりも、当時の南部社会で頻繁にあったという娯楽的な「講演」の気配を色濃く漂わせる<sup>5</sup>、喜劇的な場面だと言うべきだろう。そしてこの「喜劇」の立役者こそがウィルソンなのだ。古典的な悲劇であればタイトルを担う主人公は死すべき運命にあるが、ウィルソンは死なず、成功までおさめる。やはり「タイトルを担う」ウィルソンが「悲劇」の「主人公」であるのは釈然としない。作品の「悲劇」性にこだわれば、『ハックルベリー・フィンの冒険』の結末部(同

作 32 章以降) に対するヘミングウェイの言葉に倣い、『まぬけウィルソン』の結末は「にせもの」だと言えるかもしれない。

もっとも「悲劇」という語は、併録された「かの異形の双子」が「喜劇」と題されたことに合わせて付されたもののようなので<sup>6</sup>、この作品が古典的な悲劇の要素をきちんと含む必要はないのかもしれない。実際近年の研究では作品の悲劇性にこだわっているようなものは少なく、さらに言えば、こうして悲劇と喜劇とがぎごちなく組み合わせられ——執筆過程に即せば、悲劇と喜劇とに不器用に分離させられ——ている二作品の状態、そして『まぬけウィルソン』単体でも物語展開が散逸している様から、この作品を完成された一つの小説として読むというアプローチ自体が少ないようにも見受けられる<sup>7</sup>。しかし「かの異形の双子」に付けられた、ぎごちない併録という形式を自己演出してみせた序文の中で、「私は笑劇を引き抜き、悲劇を残した」(128)と作家自らが述べ、実際「悲劇」というタイトルを付けて出版された以上、この言葉に意図を一切見ないことも不十分だと思われるし、仮にそうした疑問を考えるのであれば、昨今の研究動向に負け戦を挑むような反動的姿勢だが、トウェインの専門家でもない一読者の立場からの試論として、この作品を愚直に小説として読んでみるという方法も許されると思われる<sup>8</sup>。

こうして本稿冒頭で述べた方針、「作品タイトルを担う人物ウィルソンをめぐる考察」は少々換言される。何故ウィルソンは「悲劇」の「主人公」なのか？

## 2

まずはウィルソンの人物像について確認したい。前節ではウィルソンのぎごちなさを強調したが、彼を肯定的に捉える論も少なからずあり、その典型的な例は、ウィルソンをシャーロック・ホームズにも勝る知性の持ち主として論じている場合である<sup>9</sup>。確かにウィルソンは、長年集めてきた指紋を物的証拠に判事殺害の犯人を特定し、子供の入れ替えまで暴露してみせ、町の秩序を回復して人々を熱狂させる人物であるから、見事「探偵」役を演じていると言えるだろう。だが、本当にウィルソンはホームズ程の名探偵なのだろうか？そして読者は、町の人々同様、秩序回復にそこまでの快楽を感じるのだろうか？

後者の点に関して、確かにこの作品の結末部は古典的な推理小説の枠組みに則る、「快楽」を与えるもののようにも見える。しかし読者は、トムの悪行を知っているとは言え、当時の黒人達が置かれていた厳しい状況もまた知っている以上、ここでトムの黒人の血を暴くという「正しい」推理が「快楽」を与えると述べるのはナイーヴに過ぎるだろう。しかも作品前半では、奴隷制に苦しむ中でのロクシーの奮闘が彼女に寄り添った語り口で鮮やかに描かれてさえいるのだ。真相暴露の結果、チェンバーズは「正しく」白人社会に戻

るが、黒人の生活に慣れ親しんできたため社会に「正しく」適合できないことを知れば、読者は快樂を得るどころか、こうした結末を導いたウィルソンの「正しさ」に疑問を持たざるを得ない。彼の「正しさ」は奴隷制度があった南部でのみ通じる箱庭的な「正しさ」であり、そこに快樂を感じる町の人々と読者との距離は決して小さくない。

問の前者であるウィルソンの「探偵」振りもどうだろうか。確かにウィルソンは北部からやって来た知識人で、学歴もある弁護士である。思索的な側面もあるようだし、次節で詳述する『カレンダー』を書くような文筆家でもある。とはいえ、そのような人物が南部に流れ、「まぬけ」と呼ばれて弁護士業もろくに出来ず、それでもなおこの町に住み続けているという不可解な行動を考えると——もっとも、こうした説明不能で一貫性を欠いた行動こそ、リアリズム的に問題を孕む点なのだが——少なくとも優秀な人物とは言い難そうだ。「まぬけ」の渾名を頂戴する契機となった冗談、「犬の半分を手に入れたいよ。[…]

その半分を殺すから」(6)も、ジョークを解さない町の知的レベルの低さを提示するエピソードであるとは言え、翻ってウィルソンの機知が優れたものとして提示される挿話でもないだろう<sup>10</sup>。こうして登場当初から、ウィルソンの「優秀さ」には疑問符がついている。

そして実際の探偵としての「活躍」に到っては、こうした難点がさらに増えてくる。物的証拠たる指紋の数々も、あくまで「酔狂 (fad)」(8)で集めたものだし、トムの指紋を手に入れてナイフの指紋との一致を見出したのも偶然でしかない(109)。しかも、ドリスコル判事の屋敷内で見かけた「少女」のことが気になるあまり、町の女性の指紋を全て照合した後でさえ、犯人が男であるという可能性を一顧だにしない(108)。この自信過剰と云うべきか視野が狭いと言うべきか、客観的に見てもどこか「まぬけ」である姿は名探偵から程遠い。ホームズであれば一目見るなり屋敷の「少女」を少年の変装だと見抜いたであろうと論じれば、ホームズを買いかぶり過ぎだろうか？

さらにウィルソンの推理の進展は、作品の肝とも言うべき子供の入れ替えに気付く場面でいっそう奇妙な展開を見せる。赤ん坊の頃の指紋が一致しないことを発見したウィルソンは、この謎を解けないまま眠ることに決め、夢の中で何か見たのか、突然、全ての謎を解明するのだ(110)。この因果関係を超越していると思えない展開をウィルソンの見事な閃きと捉えるか、あるいは運のよい偶然の発見と捉えるかは曖昧かもしれないが、現在の文脈ではこの一点のみを「見事」と評することは難しいと思われる。こうしてウィルソンの行動はさらにリアリズム的な一貫性から離れていくように見えるのだが、しかし、後述する通り、実は「見事」な可能性も十分にある。そして仮に「見事」な推理だとすれば、事態はより深刻になる。

いずれにせよ「探偵」ウィルソンは、見事な推理を進めるのではなく、具体的な手順を知る読者にすれば、事が偶然上手く運び解決に導かれるという予定調和を感じずにはられない。だからウィルソンを論じるのは無理があるのだという反論も聞こえてきそうだが、



当面の文脈で重視したいのは、彼の推理が証拠も十分で「正しい」と同時に、当時の南部社会の規範としても「正しい」ことである。ここで裁判における推理の披瀝に注目しておきたい。

上でも触れたように、ウィルソンの推理は、真犯人をトムだと特定した後、彼の黒人の血を発見するという順序であった。しかし裁判で語る際は順序が逆転し、まず自らのコレクションにおける指紋の不一致を見せつけて子供の入れ替えがあったことを先に示し、その後でトムが犯人だと告げている(118-120)。もし子供の入れ替えを暴くことがなければ、この事件は白人名士の一族における家庭内での殺人事件としてのみ終わったことだろう。しかし、本当は黒人の血が混ざっている、町の人々をも騙し続けて白人の振りをしていた人物が犯人だと先に告げておけば、傍聴者たちの関心は否応なく高まる。そしてさらに、白人の正当な跡取りの地位を奪った黒人奴隷による犯罪だと示されれば、これは単なる一つの家庭内の殺人事件には収まらず、社会的な衝撃も極めて大きい事件となり、しかも同時に、黒人による白人の殺害という構図は、白人同士の殺人事件よりも合点のいくものとなるだろう。実際、黒人トムが犯人だとされた後、作中で殺人の動機を考察するような場面は全くない。いわばウィルソンが披瀝する推理は、南部社会の規範にあまりにも「正しい」形に編集されたものであり、だからこそ、人々はショーを見ているがごとき熱狂的快楽を感じ、ウィルソンへの賞讃もかつてなく高まるのだ。ウィルソンが名探偵であるとすれば、それは彼の独力ではなく、町の人々と共犯関係にあるからこそその「名探偵」である。

### 3

前節で確認した通り、結末部の「主人公」ウィルソンは何を考えているか実のところよく分からず、確かに、彼個人の内面を伴った行動をとっているというよりも「プロット推進装置の重要な一部」のような印象を与え、読者にとって共感して寄り添える視点人物ではなくなっているだろう。ちょうど『ハックルベリー・フィンの冒険』の読者が作品の大半はハックに共感を寄せつつも、「にせもの」たる作品結末部では主人公然と振る舞うトム・ソーヤーから距離をとって眺めたくなるように、『まぬけウィルソン』も作品前半は各場面で中心に描かれている人物たちにそれなりに共感を抱きつつも、結末部のウィルソンからは距離をとらざるを得ない。このようにウィルソンは、他の登場人物たちとはどこか違った扱われ方をしていると思われる。

もう一つ、ウィルソンを他のキャラクターと異なる存在としているものに、各章のエピグラフとして掲げられている『まぬけウィルソンのカレンダー』がある。これは実際にウィルソンが書いていると作中にあるので(27)、大袈裟に言えば一種メタ的な作品構成で



ある。その皮肉な内容は、さすが政治風刺も得意としたトウェインの本領発揮と言うべきか、ここだけ取り出して読んでも実に面白い。しかし、内容の見事さとは裏腹に、このエピグラフの掲げられ方はかなり奇妙に思える。というのも、最真目で見ても「そのいくつかは章の内容と関連している」<sup>11</sup>と評されるほど、とりわけ作品前半において、作品の内容と関連していないように思われる場合が少なからず見られるのだ。

そのためか、『カレンダー』と本文との関係を考察対象としている先行研究は少なく、むしろそのぎごちなさは作品の欠点だと指摘されたことも多いようだが、バリー・ウッドによる次のような反論、『カレンダー』からの引用の多くが物語中の出来事と関連を持たないように見えるという事実は、町の理解をはるかに超えた見識を象徴的に示す役割を果たしているのだろう<sup>12</sup>が、作品におけるウィルソンの特異さ・ぎごちなさと形式の一致を鋭く指摘したものとして、検討に値する意見だろう。

ただし、ウッド自身も簡単ながら指摘している通り、作品内容との無関係さはエピグラフの全てに当てはまるわけではない。裁判の始まる 20 章のエピグラフが「状況証拠」に関するもので (104)、21 章と終章では挿絵がエピグラフと一致していることが象徴的なように (111, 119-120)、後半になるとエピグラフと本文とが分かりやすく関連を持つ場合が多く見られる。中でも内容に最も深く関わるものは、多くの論者が注目してきた数少ないエピグラフでもある最後の挿入である。

10 月 12 日、大陸発見。アメリカ発見は素晴らしかった。が、見逃されていたらもっと素晴らしかった。(120)

判事殺害の犯人と子供の入替えとが「発見」された後の展開を描く終章であるため、正に真相が「発見」されたことは「素晴らしかった」が、その後の悲劇を思えば、「見逃されていたらもっと素晴らしかった」。内容を上手すぎるほど象徴しているエピグラフである。

先に引いたウッドの見解はウィルソンと町の人々とのズレを「見識 (wisdom)」という語で示し、確かに『カレンダー』の皮肉が町の人々には通じなかったともあるのだが (27)、氏の見解は南部をいささか差別的に見ている論のように思われる。作品の時代設定から考えても、ここでウィルソンと町との間に存在する溝は「見識」といった知的な問題ではなく<sup>13</sup>、南部と北部という土地の文化の違いにまつわるものだろう。そうでなければ、最後に見事過ぎるまでにエピグラフが内容と一致する理由も説明できない。「[トムが黒人だと明かされる瞬間に] ウィルソンは彼が何者であるか、その仮面を脱いで正体を明かす——聡明で能力のある法律家、注意深く観察力のある科学者、共同体を率いるに足る実力を持つ指導者」<sup>14</sup>とも論じるウッドの見解に従えば、エピグラフと本文との一致は、町の人々

の「見識」がウィルソンと同レベルにまで引き上げられたことを象徴的に示す役割を果たしていると捉えねばならないが、そうした事態が発生したという記述は無く、推測としても考え難い。むしろ事態は逆で、エピグラフと内容のズレがゼロになったこの瞬間は、ウィルソンが南部社会の文化に見事溶け込んだことを示すのではないだろうか。

ここに到って、前節で見たウィルソンの推理の進展は改めて意味を増す。ウィルソンがトムの黒人の血を「見事な閃き」によって気付いたのであれば、恐らく彼は白人名士の（白人の）息子が殺人を犯す理由などない、と南部の規範を完全に内面化し、そのため無意識的に別の可能性を模索していたのだらう。そして、だからこそ、裁判における推理の組み立ても、無意識的に南部の規範に従って編集され、南部人が受け入れやすく賛同しやすいものに語り直すことが出来たのだ。

あるいは作品の時系列をさらに遡ると、屋敷で目撃した「少女」が（黒人）少年トムの変装だと見抜けなかったという点も、人種同様、性差も厳密に区分されている南部社会を象徴するものとして見直すことができる。フォレスト・G・ロビンソンは、夢という無意識の世界でようやく謎を解く、つまり意識の次元では謎を解けないという物語展開に、「強烈で苦痛を伴う真実に対する意識の抵抗という、悪しき信条のダイナミクス」<sup>15</sup>を観察しており、概ね賛成できるものの、上で述べた通り、この「真実」は南部社会にとっても、南部社会に溶け込んでいるウィルソンにとっても、むしろ全てをきちんと説明してくれる受け入れやすいものだったとも考えられる。となれば事態はもう少し複雑で、意識的なレベルでは、ウィルソンは性差・人種の厳格な境界を超えることができず（より厳密を期すなら、境界を超えている存在など想像だにできず）、しかし、その枠組み内では説明不能な事件に直面したために、性差・人種を南部的に「正しく」戻すという無意識の欲望に貫かれ、推理を「正しく」完遂することに成功したのではないだろうか。人種の境界を超える推理を進める前に、指紋という物的証拠があれば性差を超えられるという前提があったことも、トムの「正しくない」位置をウィルソンに示す無意識の手掛かりとなっていたのかもしれない。

こうして南部社会の一員になったからこそ謎を解くウィルソンであるから、謎を解くまでのウィルソンに冠されていた「まぬけ」という称号も、彼一人の視野の狭さではなく、南部社会そのものの偏狭さをも示していることになるだろう。「まぬけ」の称号が外れたのは、彼の見識が上昇したり明らかになったりしたわけでは決してなく、町と同質化し、町の欲望を都合よく体現しただけであるのだから。

そもそも、最後の見事すぎるエピグラフも、『カレンダー』の作者がウィルソンその人であることを思い出せば、自分が見事「発見」してみせたという事実をまるで忘れたかのように「見事」にまとめているだけに過ぎない。発見者自らが発見に関する皮肉を述べるという事態は自分自身のことを全く度外視している態度であるから、その姿勢こそが皮肉

に値するだろう。こうしてウィルソンが全てを「正しい」場所に収めた瞬間——しかも「正しい場所に収める」という価値観自体が南部的な騎士道精神と調和するものであることはよく知られている事実だろう——作品構成も過剰なまでに「あり得べき」形となり、その「あり得べき」過ぎる形式が無反省に満足に耽る彼の態度と見事に一致し、皮肉の対象となっているのだ。『カレンダー』の作者としてメタレベルに立っていたかに見えたウィルソンは、最終的にドーソンズ・ランディングという作品世界に飲み込まれながら、そのことに気付かず空疎な皮肉を見事に書き付けるばかりである。

先行研究の中には、最後のエピグラフによって、作品に描かれた南部の問題がアメリカ全般の問題にまで引き上げられると論じているものも少なからず存在する<sup>16</sup>。しかし、『まぬけウィルソン』を論じるに当たっては、こうした普遍化はかなり注意深く行わなければならないだろう。この作品の結末は、アメリカ全般の問題だと一般化して南部性に目を瞑るにはあまりにも南部的過ぎる予定調和に支配されているのだし、こうして南部性を度外視し、自分とは無関係なことかのごとく語ってみせることこそが、最後のエピグラフが皮肉となっている所以であるのだから。

#### 4

しばしば指摘されてきた通り、『まぬけウィルソン』の主題の一つは、黒人／白人の子供の入れ替えを通じ、血（内的要因）と育ち（外的要因）と性格との関係を捉えることであったのだろう。このテーマは、黒人に育てられた白人が白人社会に順応できない結末が分かりやすく象徴的なように、血よりも育ちと性格が密接に関わるものとして提示されていると言える。ロクシーやトムが黒人の血を性格の短所の原因のように語ることこそあるものの（49, 75-76）、こうした考え方自体が南部社会の規範の産物、つまり黒人たちの見方さえ白人（男性）によって作られた規範によって外から規定されているという一例であり、そもそも二人の存在自体、見た目は完全に白人であるのに 16 分の 1 あるいは 32 分の 1 だけ黒人の血が入っているだけで「黒人」だと規定されるという文化的コードの産物に他ならない。以上のような指摘は、もはや批評的クリーシェの域に達していると言えそうである。

こうしたある種の環境決定論が支配する世界において、北部から南部にやって来たウィルソンも例外ではあり得ない。先行研究では彼の「余所者」としての性格を強調しているものも散見されるが、長年にわたって南部社会に住み続け、そこの名士たちと交流を持って来た以上、彼もまた周囲の環境から影響を受けたと考えた方が作品のテーマに沿う。だからこそ彼は南部社会に受け入れられるようになるのだし、エピグラフも最終的に内容と



一致するのだ。

いや、前段落のようなまとめは恐らくミスリーディングである。『トム』は、主位奪還の正にその始まりから悪い子であった」（19、強調引用者）といった語りが示唆するように、この作品における環境決定論とは、外的要因が人物の内面を少しずつ変化させていくようなものではなく、ある外的要因が一瞬にしてその意味（≡内部）をサッと引っくり返すかのごとく変化させるものだと言うべきであろう。人間の性格をアダムとイヴにまで遡って厭世的に語り（7, 14, 18, 71）、「4月1日。その他364日において我々が何かを思い出させる日」（111）などと人間の愚かさが繰り返し警告され、しかも警告者自身がその警告に絡み取られるこの作品は、教育とか成長とかいう概念と無縁のように思われる。ウィルソンの「犬の半分を殺したい」という冒頭の冗談も、双子の半分を事実上自らの手中に収めて抹殺し、二人の運命をともに悲劇に陥れることで見事に実現されている。実はウィルソンの行動は最初と最後で何ら変わっていないのだが、町の判断が変わったためにその意味が百八十度転換し、「まぬけ」から名士へと変わったのだ。にも拘わらず、「要するにこの人物〔ウィルソン〕にはリアリスティックな一貫性が欠落している」<sup>17</sup>という評に結局のところ反論の余地を感じられないのは、社会規範を前に自分は従うか従わないかという葛藤を持つことが、近代小説の成立条件とも言うべき人物の一貫した内面の前提条件であるはずなのだが、ウィルソンにはこの前提が欠如しているためだと考えられる。言わば彼は、作品の主題を全面的に担う、外的な環境要因に決定され続ける存在として、ほとんど定義上、内的な一貫性を持ちえない人物なのではないだろうか。こうして彼は、自らが実は内面化していた南部社会の規範を何ら疑うこともなく———というか、恐らく気付くことさえ出来ず———ただただそれに従い続けるばかりなのだ。

さらに言えば、外から与えられた条件にひたすら従い続けるという、この運動とも呼べないウィルソンの「運動」は、ある程度までこの作品の成り立ちやトーンの散逸とも重なってくる。後藤和彦は評伝研究の立場から、この作品が執筆動機やそれに関わるプロットありきで書かれた小説であることを説得的に論じているが<sup>18</sup>、確かにそうした側面があるのだろうと納得させられるほど、この作品は予定調和や出来過ぎたプロットに満ち溢れている。つまり、本稿序盤で引いたコックスが示唆していた通り、プロットという外的条件に内容がほとんど全て従う作品であるわけだ。だから、ヘンリー・ナッシュ・スミスの言葉を借りれば、ロクシーだけは「支配的文化への転覆的脅威」<sup>19</sup>となり得る行動を起こすような、いわばこの作品で唯一の考察に足る近代小説的な内面を持つ人物であるのに対し、ウィルソンの内面を考えることは一貫した内面を持たない以上、確かに無益なことなのかもしれない。だが、この内面の欠如こそ、まぬけウィルソンをまぬけウィルソンたらしめる要素であることは強調しておくべきである。ロクシーのような存在を前景化させることは作品にとっても「転覆的脅威」となってしまうし、実際、ロクシーの活躍空しく、社会

規範は転覆どころか強化されて物語は幕を閉じる。見掛けはきちんと小説でありながら、実は近代小説やリアリズム文学のルールさえ破ってしまったかに思えるこの作品を書いて以降、トウェインがまとまった小説を書けなくなったことも必然的な事態だったのだろう。

こうして自らの内面との葛藤も何もなく、外的条件にひたすら流されるというウィルソンは、「自分が本来持っていた〔例えば、サミュエル・クレメンスという〕アイデンティティと、自分がつくり出したもうひとつの〔例えば、マーク・トウェインという〕アイデンティティとの間にひき裂かれた人間」<sup>20</sup>にとって、羨ましくもあり、しかしながら、だからこそ、徹底的に批判を加えたいくなるキャラクターだったのではないだろうか——ちょうど多くの先行研究が彼の内面の欠如を作品の失敗だと批判し、そして本稿も彼を徹底的に皮肉に見つめているように。こうしてウィルソンは、推理の見事故に「まぬけ」の称号を作中では脱するが、タイトルでは永遠に冠され続けることとなったのだろう。こうして我々は本稿序盤で提出した反語めいた間によりやく、自嘲気味に立ち戻ることができる。名士に成り上がったという（南部）社会的成功＝作品内での向上とは裏腹に、実は自らが陥っていた「悲劇」にさえ気付けないウィルソンは、執筆の途中で気付けば「悲劇」となっており、取ってつけたように後から「悲劇」と付された作品のタイトルを担う人物に、この上なくふさわしい。

## 注

<sup>1</sup> 本稿は2013年度夏学期に開講された柴田元幸「現代の世界文学（6）」の期末レポートを全面的に改稿・加筆したものである。そうした性格上、授業時の解説やディスカッションに大きな示唆を受けている。この場を借りて感謝申し上げる。

<sup>2</sup> Mark Twain, *Pudd'nhead Wilson and Those Extraordinary Twins*, 2nd edition, Sidney E. Berger, ed., New York; W. W. Norton Company, 2005, p. 19. 以下、作品からの引用は全て同書を用い、本文中で頁数のみを記すこととする。また先行研究含め英文からの引用は全て拙訳を用い、紙面の都合で原文は割愛した。なお本稿では先行研究の簡便なまとめとして、同書に収録されている批評集を大きく参考にしている。

<sup>3</sup> James M. Cox, "The Ironic Stranger," *Pudd'nhead Wilson and Those Extraordinary Twins*, p. 286.

<sup>4</sup> 『まぬけウィルソン』というタイトルで『まぬけウィルソン』と「かの異形の双子」の両方を指す場合も多いのだが（Cf. *Mark Twain's Pudd'nhead Wilson: Race, Conflict, and Culture*, Susan Gillman and Forrest G. Robinson, eds., Durham; Duke University Press, 1990, p. vii）、本稿ではあくまでこれら両作を別箇に捉え、『まぬけウィルソン』という言葉では前者のみを指すこととする。なお、本来1つの作品であったものが分離されながら、最終的には言い訳のような筆者の言が付された併録という形となったことに関しては次の論が極めて説得的である。後藤和彦『迷走の果てのトム・ソーヤー——小説家マーク・トウェインの軌跡』松柏社、2000年、特に281-291頁。

<sup>5</sup> この点に関しては例えば次の著書が詳しい。亀井俊介『サーカスが来た！——アメリカ大衆文化

覚書』東京大学出版会、1976年、特に第3章「さすらいの教師たち——にぎやかな講演運動」。同章7節が「マーク・トウェイン」と題されている通り、トウェインの「ショーマン」としての側面と作品との関連を論じている点でも同書から多くの示唆を得た。

<sup>6</sup> Cf. *Pudd'nhead Wilson and Those Extraordinary Twins*, p. xx.

<sup>7</sup> 例えば1990年の論集の「イントロダクション」では編者によって、「我々はトウェインの物語の非一貫性を、美的失敗ではなく、政治的兆候として読む」と宣言されている。(*Mark Twain's Pudd'nhead Wilson: Race, Conflict, and Culture*, p. vii)

<sup>8</sup> 「かの異形の双子」の序文を額面通りに受け取れば、ウィルソン、ロクシー、そしてトムの登場こそが『まぬけウィルソン』へと変化した要因であるから(126)、その意味でも「悲劇」という題と登場人物の関係は必然的な問だと言える。だから、逆に言えば、ウィルソンに関する考察が少ないことと「悲劇」の問題が論じられなくなったことも必然的な関連を持つのだろう。

<sup>9</sup> 例えば Susan Gillman, “‘Sure Identifiers’: Race, Science, and the Law in Pudd'nhead Wilson,” *Pudd'nhead Wilson and Those Extraordinary Twins*, pp. 445-464. 特に pp. 455-456 参照。

<sup>10</sup> この冗談をウィルソンの機知の表れと解す先行研究もあるが、コックスが参照するジェイ・B・ハッペルによれば、このジョークは「小さな町のユーモアの典型」である。にも拘わらず生じる町とウィルソンとの乖離に、ハッペルはリアリズムからの逸脱を、コックスは一種の同族嫌悪をそれぞれ見て対立しているのだが、両者ともウィルソンの機知が「優れたもの」として描かれているのではないという見解は共通している。(Cox, *op. cit.*, p. 283)

<sup>11</sup> 亀井俊介監修『マーク・トウェイン文学／文化事典』彩流社、2010年、138頁。

<sup>12</sup> Barry Wood, “Narrative Action and Structural Symmetry,” *Pudd'nhead Wilson and Those Extraordinary Twins*, p. 340.

<sup>13</sup> 註10のハッペルとコックスの見解を引けば、さらに明快だろう。

<sup>14</sup> Wood, *op. cit.*, p. 344.

<sup>15</sup> Forrest G. Robinson, “The Sense of Disorder in Pudd'nhead Wilson,” *Mark Twain's Pudd'nhead Wilson: Race, Conflict, and Culture*, p. 38.

<sup>16</sup> 例えば『マーク・トウェイン文学／文化事典』、138頁。

<sup>17</sup> 後藤、前掲書、315頁。

<sup>18</sup> 同上、特に第5章「切断の意味、あるいは父殺しふたたび——『まぬけウィルソン』の決意」全体を参照。

<sup>19</sup> Henry Nash Smith, “Pudd'nhead Wilson as Criticism of the Dominant Culture,” *Pudd'nhead Wilson and Those Extraordinary Twins*, p. 276.

<sup>20</sup> 柴田元幸『アメリカン・ナルシス——メルヴィルからミルハウザーまで』東京大学出版会、2005年、55頁。

## 参考文献

Gillman, Susan, and Forrest G. Robinson, eds. *Mark Twain's Pudd'nhead Wilson: Race, Conflict, and Culture*. Durham; Duke University Press, 1990.

Twain, Mark. *Pudd'nhead Wilson and Those Extraordinary Twins*, 2nd edition. Ed. Sidney E. Berger, New York; W. W. Norton Company, 2005.

亀井俊介『サーカスが来た！——アメリカ大衆文化覚書』東京大学出版会、1976年。

亀井俊介監修『マーク・トウェイン文学／文化事典』彩流社、2010年。

柴田元幸『アメリカン・ナルシス——メルヴィルからミルハウザーまで』東京大学出版会、2005年。

後藤和彦『迷走の果てのトム・ソーヤー——小説家マーク・トウェインの軌跡』松柏社、2000年。



## Why Is Wilson a “Tragic Hero”?

### A Reading of Mark Twain’s *Pudd’nhead Wilson*

IMAI Ryoichi

*Pudd’nhead Wilson* is full of puzzling aspects. For instance, in 1894, when this novel was published in book form in the U. S., it was entitled *the Tragedy of Pudd’nhead Wilson*, which is still used in many editions today. Its title character, however, doesn’t have a tragic fate but succeeds in his life. Why is this novel a tragedy and why is Wilson a tragic hero? Moreover, passages from *Pudd’nhead Wilson’s Calendar* are inserted as epigraph at the beginning of each chapter, but many of them are not related with the story. What is the purpose of these epigraphs? I answer these questions by analyzing both the substance and the form of this novel, and by demonstrating that the irreverence of the epigraphs indicates Wilson’s unique position in this novel. Wilson embodies the major theme of the novel, which can be summarized as “environmental determinism,” and therefore is perfectly suitable as the title character of this “tragedy.” Twain also made Wilson a satirical character in order to criticize the narrow-minded view of the South.